

主題	ショートステイにおける“介護のしにくさ”に関するインターベンション		
副題	地域ケアの中のショートステイの役割		
ショートステイ		医療と介護の連携	
研究期間	1か月	事業所	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム 久我山園
発表者：上村美智留		アドバイザー：市橋奈緒美	
共同研究者：			
電話	03-3309-3211	メール	
FAX	03-3326-6054	URL	<a href="http://kugayama-en.org">http://kugayama-en.org</a>

今回発表の事業所やサービスの紹介	久我山園は、病院と老健が同じ敷地内にあるため、家族や地域事業所からの期待が高い施設です。しかし、同一敷地内で連携を図っていても、健康状態や認知症の行動・心理症状が不安定な場合には、期待に応えられない場合も多いのが現実です。できるだけ、利用者や家族、地域事業所のニーズと施設サービスの段差が低くなるよう、日々努力を重ねています。
------------------	---

### 《1. 研究前の状況と課題》

自宅で最期まで過ごしたいというのは、誰しもが持っている願いだと思います。

しかし、認知症の行動・心理症状が進行したり、健康状態が不安定になると、介護者も負担感が強くなります。さらに、介護者自身の生活リズムや安定性が損なわれてくると、介護そのものが重荷になってしまいます。

そのような中、利用者や家族は、ニーズを表現できなかったり、潜在化しているニーズの解決の糸口が見いだせないことがあります。

また、認知症の症状や健康状態が不安定なままショートステイを利用される方も多く、利用者や家族も「何が介護のしにくさの原因なのか」を認知していない現状が、見受けられることもありました。

### 《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

そこで、本研究の目的は、家族が持つ“介護のしにくさ”の原因を特定し、それに対する情報提供や介護方法、療養指導に力を入れた実績を評価することです。

施設におけるショートステイは、単に在宅生活の延長線上にあるだけではなく、多職種が一同になって情報交換が柔軟に行える空間です。また、日々の生活については、直接介助（日常生活行動援助）と間接介助（居宅介護支援事業所や他事業所からの情報収集など）を組み合わせ、利用者に接することができるため、利用者や利用者を取り巻く環境について、多角的に“介護のしにくさ”の原因を特定することができると思います。

ショートステイ利用中に、少しでも“介護のしにくさ”の原因が特定され、調整されれば、在宅介護の継続支援の質の向上に寄与すると思います。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

研究の対象は、平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月までに久我山園のショートステイを利用された約 350 名（累計）の方です。

研究方法は、記録類から“介護のしにくさ”を特定し、実施したケア内容を抽出する質的帰納的な手法です。

“介護のしにくさ”の分類や実施したケア内容は、口村（2011）<sup>1)</sup>と吉村他（2011）<sup>2)</sup>のショートステイにおける生活相談員や看護師の悩み、利用者の受け入れ制限等の判断材料等についてまとめた内容を“介護のしにくさ”の原因として抜粋するとともに、ケア内容をカテゴリー化するときの参照にしました。

### 《4. 取り組みの結果と考察》

“介護のしにくさ”は、《利用者の認知症の急激な進行による対応困難》、《利用者の体調不良による家庭内看護の限界》、《利用者の症状別対症療法困難》、《介護に対する家族間の意見の相違》などがありました。また、これらの課題について、ショートステイ利用中に、「認知症の行動・心理症状を観察し対応の工夫をする」、「フィジカルアセスメントをして医療につなげる」、「症状にあった介護や看護方法を説明・教育する」、「家族を動員して介護の見通しを調整する」などがありました。

2008 年に厚生労働省の審議会で例示された医療と介護の連携シートでは<sup>3)</sup>、入院・入所中に行われた緊急性の症状、療養生活指導、在宅版医療の工夫、リハビリ、必要な物品等の利用者や家族への教育・支援項目が列記されていますが、本研究結果も、同様な方向性を持っており、ショートステイが担うべき姿が現れていると考えられます。

### 《5. まとめ、結論》

ショートステイを利用することによって、“介護のしにくさ”が可視化され、それに対して多職種が継時的な観察やケアを行っていることが明らかになりました。この結果は、在宅介護支援を積極的に行うためのショートステイの役割がみえてきたことを示唆していると思います。今後は、“介護のしにくさ”の原因を特定するための標準化した書式を作成していきたいと思います。なお、研究デザインが横断的であるため、科学的根拠性を高めるためには、ケースコントロールスタディが求められると思います。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うために、収集したデータは、数値化したり、加工して個人が特定できないようにしました。また、研究は、所属長の許可を得ました。

### 《7. 参考文献》

- 1) 口村淳：高齢者ショートステイにおける生活相談員の悩みとは何か、評論・社会科学 97、81-91、2011
- 2) 吉村久美子他：特別養護老人ホームにおけるショートステイ利用者のケアの充実にむけて、岐阜大学・看護生涯学習支援、69-73、2011
- 3) 第 50 回社会保障審議会介護給付費分科会、医療と介護の連携、厚生労働省、2008

### 《8. 提案と発信》

在宅介護支援におけるショートステイの機能は、直接的な介護支援のみならず家族間調整や各機関の連携強化の使命も兼ね備えていると思います。これからも、施設内だけでなく、地域のサービスと連動したケアを行っていききたいと思います。

【メモ欄】